『あおきそらはなつに鳴く』

raku-7

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『あおきそらはなつに鳴く』

【Ｎコード】
Ｎ２９７４Ｊ

【作者名】
ｒａｋｕ－７

【あらすじ】
やさしさにつつまれた世界≠幸せな世界

≠のぼりだすおんかい

夏休み。

その響きは甘美でありながらとても透き通っている。

しかも高校2年生で、大学受験の予定も無い、となれば其処に在るのはもはや楽園と呼んでも構わないだろう。

夏休みに出来る事はいくつあるだろうか。

海水浴。夏祭り。花火。キャンプ。結果を求めない勉強会というのも意外とオツだろう。

きっと全部やってもまだ余りが出るはずだ。

それが高校2年生というものだ。

無責任に似たモラトリアムに包まれている。

夏休みまで後一週間。

この時点でジンロウの夏休みの予定はおおよそ確定している。
無計画というのもなかなかどうして魅力的ではあるが、それはもう昨年堪能した。

昨年の素敵過ぎる思い出をフラッシュバックさせながら、ジンロウは夏休みの計画が書き込まれた日程表を再確認した。

・夏期休暇（８／１～８／３１）中日程表
８／１．２：通常練習
８／３～８／２０：対外試合合宿（沿岸）
８／２２～８／２５：自校セミナーハウス合宿
８／２７～：通常練習

光凛高校　闘球部

これだから体育会系は……これだからラグビー部はっ……！！

真夏の熱気と相まって、ちょっと興奮しただけで何かがわからなくなったが、間違ってはいないとも思った。

兎にも、角にも、だ。

後一週間のうちに死なないけれど入院はしちゃう程度の、でも最終的には全快に至るケガ及び病気にならなければいけない。

其れが現在抱える切実な願いであり、気分の波が激しくなる瞬間には、成さねばならぬ義務にさえ思えてくる。

宛ての無い現実逃避行に旅立ってから数分。

特に具体的で良い答えが出る道理が無いので、その通りになり、果ては全く何も考えなくなっていた。

無心の効能で気分が落ち着いてくると、現実から逃避しようとする考えも薄れてくる。

部活休みたさに病気もケガもしたくはないし、夏休み中入院など深く考えなくとも言語道断である。

考えなくてはいけない。現実を素敵で輝かしくもだらしのない青春的な感じに出来る方法を。

頭をフル回転させて考えると、あっけなく正答らしきものがはじき出される。

困ったものだ。

そっちには行きたくないのに。

なので、とりあえず「部活動に全力を尽くし、美しい汗と仲間との友情と謂う名の青春ポイント高めのアレを素直にゲット」案は却下とまでは言わないが、保留にして置いておく。

「……はぁ……えろいことしたい……」

なんて、朝のＨＲ前の教室で呟くものではなかった。

「よし、じゃあ、するぞ」

こういう事になるから。

いつの間にかジンロウの体に桜井　エリがくっついていた。

朝から自席で予定表だけを睨み付けていたジンロウ、日比野　ジンロウは、肩にがっつり腕を回されるまでコイツの接近に気付く事が出来なかった。

正直、暑い。その上、甘ったるい匂いが熱に乗って鼻についていた。

「さ、ドコでする？　トイレ？　屋上？　それとも今すぐココでぁがっ……！？」

密着しかけていた首と首の間に手首を突っ込み、力任せにまとわり付く熱気を引き剥がす。

「くっつくな。感染る」

尚もくっついて来ようとするエリの目前に二の腕を掲げると、吸い寄せられる様に彼女の首がそこに引っかかった。

「なにがだよぅぅ……ちょ、苦し……」

こっちに来ようとするから首が圧迫されて苦しいのだろう。

近付こうとしなければいい。とは言わない。

エリには愚問だろうから。

「ぅぅ……うふ、うふふふふふ」

不意にエリの表情が苦痛から快楽に変化するのを見た。

戦慄。

とまでは流石にいかなかったが、少し寒気は覚えた。

初めてこの現象を見た時、ジンロウは反射的にエリを突き飛ばしたが、次に同じ顔を見た時にはもう免疫ができてしまっていた。

それと、最初に突き飛ばした時、酷く冷めた様な、傷付いた様な、そんな様な顔をなぜだかしていたのを今でもジンロウははっきり覚えていた。

それを見た時に何か、罪悪感でも自己嫌悪でも無い、とにかく、酷くつまらない気持ちがあった。

ジンロウがエリを突き飛ばさなくなった事とは特に関係は無いだろうが。

ラガーマンは紳士なのだ、女子どもに手を上げるなんて軽蔑さるるに足る愚行だ、恥を知るべし。

と、しておくのがよいか。

つまり、ちょっと寒気を覚えたくらいでジンロウはエリを無慈悲に叩いたりしない。

「はうぅ……もっとぉ」

握り締めた拳から血の滲む様な感覚はしたが、火を吹くことはなかった。

ラガーマンウソツカナーイ。

いっそ、この心の原住民ごとひっぱたいてやろうかとジンロウの頭部の温度が上昇しかけたが、生憎。

己への甘さ故に、他人への厳しさが未完成なのだよ私は。と、面倒くささを正当化してみた。

「はーい、自分の席座ってー」

その声と同時にチャイムが鳴る。

教卓に若い女が怠惰な表情で立っていた。

浅井　ハルコ、二十四歳。このクラスの副担任らしいが、教室に姿を現すのはごく稀だったりする。

この学校に赴任して3年目になるらしいが、どうやら彼女にはこの学校に馴染もうなどという謙虚な野望すら無い様だ。

それが彼女の言動から見て取れるのはどうやらジンロウだけと、専

ら噂らしい。個人的(ジンロウ)に。

「はーい今朝のホームルームは担任の佐々木先生が只今会議中の為、わたしが執り行います」

其の一。まだ教室の中はうるさい。

つまり。自分の話は聴いてもらわなくて結構、ガキ同士で不純に不健康な事でもしてれば案外立派な大人になれるよ教育法を実演する、現代にはよくいるチャレンジャー精神を備える教師なのだろう。

もっとも、そんな教育法で現代の教育現場に挑戦する教師は彼女くらいしか見たことがない。

「じんろーいたーいぃ」

エリがうるさい。

しかし、ジンロウは聞こえてない事にして前を向く。腕だけはしっかりと壁若しくは柵としての仕事を続けてもらう。疲れるが仕方がないだろう。

「……」

目が合っている。気がしないでもない。

しっかりと普通の生徒らしく前を向いていると何故だか、ハルコ先生と見つめ合う形になる。

気恥ずかしさ、なんて素敵な感情が芽生えないのが、残念な反応なのか正常な反応なのか、どちらにしても大した事ではない。

「がうるるー」

エリは獣化でもしたのか、ジンロウの身体にしっかりと抱き付きながら唸っている。細い指が肩に食い込んで、やや痛い。

しかし、ハルコ先生を威嚇しても無意味なんだろうな、とか、それこそ無意味な事をジンロウは考える。

多分あの人は獰猛な肉食獣の前に立たされても、それなりに怖がりはするんだろうけどきっと、その全てのどこかにアンニュイな気配が含まれているのだろう。

キャラクター化して欲しいものだ。

「……です。これで朝の連絡は終わりですが、何か質問はありますか……？」

くだらない事を考えていたせいか時間が経つのが早い。

ハルコ先生の話はもう締めに入っていた。

ここで質問でもしようものならきっと、ハルコ先生はそのご尊顔を露骨に歪ませて面倒くさい旨を体現するだろう。

ジンロウがくだらない事を考えていると、ホームルームが終わっていた。

「ねぇ、じんろー？　四時限目終わったらふけようよ」

「おめーはいつのヤンキーさんだよ……？」

四時限目、体育の授業内容はいつも通り生徒の自由な発想と提案に任せられていたので、皆はいつも通りに（教師推薦はソフトボールらしいが）各々に体育館でバトミントンやグランドでサッカーなどに勤しんでいた。

そんな中、ジンロウはエリと体育館のステージで愛のプロレスごっこ（エリ談）に汗を流していた。

実際はステージで寝ていたジンロウにエリが襲いかかったのだが、ジンロウの一貫した無反応さにエリもそのまま横で動かなくなり、早十分。

これなら愛のプロレスごっこの方がよっぽど生産的だね、とは誰も言ってくれない。

「いいじゃん、平日の日中に歩く街は楽しいぞう」

「んー」

エリの言葉にジンロウの心は揺れた。

確かに平日の日中に歩く街は楽しい。

具体的なイベントがあるわけではないが、学生が普段見ている街とのちょっとした差異がジンロウ的にはツボなのだ。

学生が好み、賑わう店や場所に学生が居ない風景。

どれも、学生が学校に閉じ込められているからこそ成り立つ状況だ。

結局。

エリは体育の授業が終わった後、早急に着替えて学校を無断早退した。

”着替えて”といっても、着替えた後のエリの格好は、下は制服のスカートの下に膝まで捲ったグリーンジャージを装備、上はしっかりタイまで締めた夏制服の上に裾襟が黒の白ジップジャージを羽織る、といった残念さん加減だった。

本人曰わく「おまたがすーすーするゾ」とかで、特にジャージインスカートは必須なのだとか。

一方ジンロウは四時限目終了後、学ランに着替え、友人と昼食を共にした後「アイタタタ頭痛ガ痛イ。今日ハ部活休ミマス」と同じクラスのラグビー部マネージャーに告げ、頭を抱えながら五時限目の始まりを告げるチャイムと共に昇降口を出た。

少々の後ろめたさはやはり部活に関してだが、一度スイッチを切り換えてしまえばそんな事は些事中の些事と化す。

高校生万歳な心持ちだ。

校門を出るとジンロウは足早にエリが待っている学校最寄りのゲーム屋へと向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2974j/

『あおきそらはなつに鳴く』

2011年1月28日09時07分発行